

札幌医科大学保健医療学部

# F D 通信

## F D 通信

第 9 号(2006.2)

## 目 次

「学生による授業評価」を実施して.....	1
授業参観形式による F D をいかに進めるか	
筑波大学の事例を中心に .....	2
F D ワークショップ実施報告.....	5
シリーズ：大学教育のヒント 4 .....	6
シリーズ：忘れられない授業 5 .....	9
シリーズ：わたしの授業紹介 4 .....	11

## 「学生による授業評価」を実施して

F D 活動委員長（看護学科） 稲葉佳江

本学部ではよりよい授業づくりのため、今年度の7月下旬に初めて実習科目を含むほぼ全科目の前期授業評価を実施し、11月初旬に結果の科目別返却と公開の全ての作業を終了しました。滞りなく実施できたことは非常勤講師を含む全教員の協力と、準備から実施・集計・返却などの全ての作業過程で F D 活動委員と学務課教務第二係および全科研究補助員の連携体制があったのことに深く感謝します。

今回授業評価を実施した科目数は97科目で、回収率は全体で83%でした。科目別回収率には差がみられましたが、ほとんどの学生の協力を得ることができたと思われます。結果では、全科目平均点（5点満点）は4.12点で、全科目のうち4点台は58科目（60%）、3点台は35科目（36%）でした。なかでも臨床実習や実技演習など身体活動を伴う科目の平均点が高い傾向にありました。F D 活動委員会では、今回の回収率および評価ともにほぼ満足のいく結果と評しておりますが、今後とも授業改善に向けて各教員のより一層の努力をお

願いたいと思います。また、自由記載のなかで、学部対応を要すると思われた事項は教務委員会あるいはカリキュラム委員会での検討を要請したところです。しかし、なかには教員個人に向けられた感情表出の記載もみられ、学生による授業評価が学生自身の「公正な評価力」なくしては成り立たないことも実感しています。

評価結果は保健医療学部ホームページで公開しております。本委員会では公開内容とその範囲を決定するにあたり、他大学から情報収集を行い、学部長の方針のもとに慎重に検討を重ねてきました。他大学からは学生の言いたい・書きたい放題になることや、教員の弁明の機会がない不満などの声も聞こえてきました。本委員会では、学生による評価結果が一方向的にならないよう、科目別返却時に教員からの返答用紙を同封することで教員側からも授業の教育的意図や問題状況の客観的な把握に努めました。

今回の授業評価を終えて、今後改善すべき課題として、評価内容では質問内容の一部と自由記載

のあり方、実施に関しては学生の評価力の問題、継続するための人的・物的体制の整備などが挙げられました。本委員会はこれらの課題を善処すべく検討しているところです。

最後に、よりよい授業は教員と学生が協同する過程にあります。学生による授業評価が、教員に

としては「学ぶ力を引き出す」授業づくりのヒントになり、また学生にとっては授業づくりに参画することで学習への主体性を形成する一助となることを期待したいと思います。本委員会は今後もそのための努力を重ねていきたいと思っています。

## 授業参観形式によるFDをいかに進めるか 筑波大学の事例を中心に

FD活動委員会では、2005年7月26日に、佐野享子先生をお迎えして、「教員による授業参観の実際」のテーマで講演会を開催いたしました。佐野先生の筑波大学でのご経験を交えたご講演は、来年度から授業参観を計画している本学部にとって示唆に富む内容でした。この度はご多忙にもかかわらず、FD通信のためにご執筆くださいました。佐野先生には厚く御礼申し上げます。

筑波大学大学研究センター 佐野享子

筆者は、勤務校である筑波大学において、授業参観形式によるFDプログラムの実施に関わってきた。他大学において実施された同様の形式によるFD研修会に参加した経験をも踏まえながら、授業参観形式によるFDをいかに進めるかについて考えることとしたい。

### 1 筑波大学の事例

筆者が関わった筑波大学の事例から紹介しよう。FDを「啓蒙的な伝達講習型」から「協働的な相互研修型」へと転換することをねらいとし、筑波大学教育計画室（当時）では、平成13～15年度に、学士課程レベルの授業を対象とした「学群・学類授業参画プロジェクト」と称するFDプログラムを実施した。

参観者は当時の教育計画室のメンバー（学内の教員7名）であり、学類長等の推薦を受けた教員の授業を参観し、授業記録を報告書にとりまとめた。報告書に掲載された授業ごとの授業記録は、授業参観者が授業後に作成した参観記録と、学生に対する授業感想アンケート（授業最後の5分間で記入させ回収）をもとにして作成された。参観記録等の記入項目は下記のとおりであり、いずれも自由記述による。

・参観記録の記入項目（1）授業者について：授業の構成・展開、教授技術（話し方、教具・教材等）、際立った点、疑問点、（2）学生について：学生の興味・関心度・集中度、学生の参加度  
・学生の授業感想アンケートの記入項目：分かりやすさ、興味、有益さ、理解度、期待度の観点からの意見、よかった点、改善すべき点

授業記録は授業者へ送付し、記録された内容に対する授業者の意見を付して報告書に掲載するとともに、年度末には授業者と参観者による相互研修会を実施することで、授業者と参観者との相互研修の機会とした。平成15年度には、学類長等の推薦を受けた着任5年未満の若手教員の授業を対象に、授業評価を併せて行う試みも実施した。参観対象授業数は、13年度12授業、14年度21授業、15年度9授業（うち若手教員6授業）である。受講学生は科目によって10数人～100人以上と多様であり、授業形式も講義型のみならず語学、実習、体育を含めてバラエティに富んでいる。副学長からのトップダウンによる呼びかけが功を奏して、組織の偏りなく授業者を得ることができ、授業に定評のある教員がどのような授業を行っているのか、学内の教員に広く紹介することができたように思う。

## 2 事例から考えること 「授業観」の共通理解の必要性

3年間の授業記録の分析を筆者なりに行った結果、考慮すべきいくつかの課題も見受けられた。第一は、授業の進め方について参観者と学生との間で認識の違いが生じている例が少なくないという点である。授業参観者からの授業への指摘の大半は、授業のテンポ・口調、教材の活用、時間配分(「話し方にめりはりがある」「声が聞き取りやすい」「プリントがまとまっている」など)といった、「目で見てわかる」範囲の事柄であった。しかしながら、参観者が「目で見て」判断した事柄であっても、同様の認識を学生が抱いているとは限らない。参観した教員が「テンポが良い」と評価した授業に対し、学生からは「授業の進度が早く理解できない」「トピック相互の関係が理解できない」との指摘がなされたり、参観した教員が「授業者から頻繁に発問がなされて学生とのコミュニケーションが良く図られている」と評価した授業に対し、学生から「いきなり質問されても考える時間がとられていないと困惑する」との指摘がなされるなどといった例である。このような進め方でわが大学の当該分野の学生が授業を理解しうるのか否かといった判断は、学生との日頃のやり取りから教員が経験的に会得する以外にない。その意味で専門外の教員が参観者となることに対する一定の限界があることは否定できないであろう。

第二には、改善すべき点が見受けられた場合に、参観者側の教員が具体的な改善策をアドバイスできるかという点である。例えば討論形式の授業の進め方に対する学生からの意見を受けて、参観者として「教員が討論技術に習熟することが必要」と指摘することはできても、具体的にどこをどうすれば良かったのか、アドバイスできる教員がどれだけいるだろうか。学生の意見から、高等学校までの授業とは異なるスタイルで行われる大学での授業の受け方そのものに学生自身が慣れていない様子をも窺い知ることができ、そのような学生に対して、授業を通じて授業の受け方そのものをいかにして身に付けさせるかとの視点に立ったアドバイスも必要になってくる。より良い授業の進め方について日頃から試行錯誤を重ね、経験的にそれらを会得している教員が参観者に加わること

が望まれる。

第三には、参観者が授業者の授業意図を掴まないうままで指摘を行うことの危険性である。1時間の授業を参観しただけではカリキュラム全体の中での本時の位置づけまでは参観者にはわからない。また授業の中で取り上げられたトピックや発問が、どのような意図で本時全体の流れの中に位置付けられたのかといった点も参観の重要なポイントとなる。授業者側の授業意図が参観者に伝わるか否かで、指摘事項そのものが左右されることを考えれば、授業後に授業者と参観者との間で意見交換の場を持つことが重要と考える。

第四には、若手教員の授業にはベテラン教員の授業にない良さがあるという点である。若手教員の授業であるからといって改善点の指摘が多いとは限らず、若手教員の授業で見られた良い点と改善点は、対照的にベテラン教員の授業での改善点と良い点として指摘される傾向が見られた。例えば学生との相互性を重視しているといった若手教員の授業の良い点が、ベテラン教員の授業においては欠けていると指摘された事例が少なくなかった。さらに授業の構成(時間配分等)については、若手のみならずベテラン教員の授業に対しても改善すべきとの指摘が多く見られ、授業経験を漫然と積むだけでは改善が難しい事項であるように思われた。授業参観形式によるFDにおいては、若手教員とベテラン教員とが互いの授業を参観しあい、良い点・改善すべき点をともに検討しあうことで互いの授業の良さを学びあう機会とすることが望まれる。

以上の実践から総じて言えることは、どのような授業が良い授業なのかといった「授業観」について参観者どおしで意識合わせをしておく必要があるという点である。時間の無駄がなくよどみない講義がなされる授業が良い授業であるとの「授業観」を持っている参観者の目には、授業のテンポが良いだけでそれらが良い授業であると判断されることになる。どのような授業が良い授業なのか、参観者間で意識合わせをすることによって、授業に定評のある教員の授業を広く学内の教員に紹介するといったプログラム本来の意図をより効果的に果たすことが可能になるものと思われる。

### 3 授業参観形式によるFDのタイプと各々の課題

筑波大学の事例に類した試みはいくつかの大学で実施されており、学外者にも公開されている例が少なくない。授業者と参観者との間の検討会を授業後に定期的に行っている大学も少なくなく、筆者もこれまでにそのいくつかに参加させていただいている。これらの大学からしばしばうかがうのは、専門分野が異なると参観者が「受講者」になってしまう、発問・板書等の授業技術に対する意見が出されないといった、筑波大学の事例に対して筆者が抱いていると同様の問題認識である。また授業後の検討会については、授業後に検討会を持つと拘束時間が長くなるため学内教員の参加者が得られない、検討会で議論される話題が学生の授業態度やカリキュラムそのものの問題点などを中心として毎回限られ、次回以降の授業改善に結び付く議論が行われにくいとの意見をうかがう。

メディア教育センターの田口真奈氏は、FDの一貫として公開授業を行っている国内13大学の事例をもとに、それら授業公開の形式を5つに類型化し、タイプごとの特徴と問題点を指摘している。「公開授業」というイベント実施でFDへの意識を高める「啓発型」「良い授業」「授業技術」を学ぶ「モデル伝達型」同一学科内の教員が授業内容・教え方を調整する「ファカルティ連携型」授業の問題点を改善するために他の教員の意見を聞き改善の糸口を探す「反省型」問題が生じた時に一緒に乗り越えることができるネットワークを形成する「ネットワーク志向型」がそれである。

筑波大学の事例は、上記のうち「モデル伝達型」であり、若手教員に対する授業評価を取り入れたケースは「反省型」に該当するといっていよう。また筆者が訪問を行った授業検討会を実施している他大学の事例は「ネットワーク志向型」である。田口氏は、「啓発型」の問題点として、改善の視点を得るための文脈のすり合わせが重要である点を、「反省型」の問題点として、教育方法の

専門家対素人という構造を生み出す可能性があるという点を、「ネットワーク志向型」の問題点として、継続に意味がある故にマンネリ化が避けられないという点をそれぞれ指摘している。

「改善の視点を得るための文脈のすり合わせ」は、筆者が先に述べた、授業者の授業意図の理解や「授業観」についての意識あわせに通ずる指摘である。「ネットワーク志向型」におけるマンネリ化に対する認識は、検討会で毎回出される課題に限られてしまうといった他大学の事例でも見受けられた指摘であり、より良い検討会の持ち方について、大学相互の情報交換を行うことが有意義となろう。若手教員に対する授業評価は、教育方法の専門家対素人との意識を教員間に生み出すおそれがあるともできるが、懸念すべきなのは、むしろそれらの意識が現実と乖離している点であるように思われる。

大学全入時代を迎え、入学してくる学生そのものが以前とは様変わりしている昨今、「教育方法の専門家」と言えるだけの教員が大学の現場にどれだけ存在するであろうか。教員経験年数に関わらず、専門分野を同じくする教員どおしが、相互の信頼関係に基づいて、互いの教育技術を磨いていく教員文化を育てること、またFDプログラムの実施の仕方そのものについてを大学間で情報交換し検討しあうといった大学間ネットワークを志向することが、今後は重要になるものと思われる。

#### (参考文献)

- ・拙稿「授業改善への指摘を通じたFDへの示唆」『平成15年度筑波大学教育計画室活動事業報告書』2004年。
- ・拙稿「授業改善への指摘を通じたFDへの示唆(2) - 若手教員による授業の参観記録を中心として - 」『大学研究』31号、筑波大学大学研究センター、2004年。
- ・田口真奈他「FDとしての公開授業の類型化 - 13大学の事例をもとに」『日本教育工学雑誌NO.27、2003年。

## F D ワークショップ

### 「保健医療総論の改善に向けて」の実施報告

F D 活動委員（作業療法学科）坂上真里

F D 活動委員会によるワークショップ「保健医療総論の改善に向けて」が、12月20日15時～18時に行われました。F D 活動委員会では、これまで講演会を中心に企画して参りましたが、今回は初めてワークショップという形式で開催させて頂きました。初めての試みのため企画段階ではどのような展開になるのか等不安な点もあったのですが、44名の学内教員の参加によって活発な意見交換が行われました。

今回のワークショップでは、現在各学年に配置されている保健医療総論～に焦点をあて、授業を改善していくための具体案の検討と、授業観等に関する教員間の相互理解を深めることを目的とし、具体的には各保健医療総論の実施報告、グループワーク、各グループによる報告というスケジュールで行いました。この報告では、特に各グループからの報告について記載させて頂きます。

グループワークは6グループに分かれ、各保健医療総論の実施報告を参考にして、授業の課題や改善のための具体的なアイデア等が話し合われました。各グループで話し合われた内容は次の通りです。

- 1 グループ：保健医療学の構築と保健医療総論の位置づけについて
- 2 グループ：保健医療総論の学習内容と学習目標について
- 3 グループ：保健医療総論の学習目標と学習方法について
- 4 グループ：担当教員の配置と開講時期について
- 5 グループ：開講時期、保健医療総論～の流れ、担当教員の配置について
- 6 グループ：保健医療総論、の学習内容について

今回複数のグループで話題にあがった内容は、学生の対象者理解や主体的な参加を引き出すため



の方法の検討と、保健医療総論～の流れの見直しでした。最近、学生の学習態度の変化や、学生が実習を‘こなす’ことが中心になっている点が指摘されています。そのため、早期から医療専門職としての姿勢を形成すると共に、学生に対象者の生活実態を伝えていくことが重要な課題となっており、今回のグループワークでも中心的な話題となりました。グループ報告では具体的な改善案も提示され、例えば模擬体験にとどまらず障害者の生の声を聴く機会の提供や、患者会等を通じた対象者との関わり等があげられています。その際、対象を障害者だけにするのではなく、様々な人生の体験をしてきた人たちからの話を聴くことが重要との指摘もありました。また、学生の主体的な参加を引き出す方法については、事前学習や学生による実習施設の選択等の案が出されました。

さらに保健医療総論全体の流れに関する内容では、今回改めて検討したところ、方法論やチーム医療といったキーワードにおいては、効果的な配置になっていることが複数のグループから指摘されています。ただし中には、保健医療総論全体の柱や開講当初の意図が不明確になっているため、再確認する必要があるとの声もあがっていました。

この他、保健医療総論～の‘テキスト化’

や‘症例バンク’といった早急な効果が期待されるアイデアも報告されました。

運営面については、かねてからの話題でもありますが、多くのグループから担当教員と開講時期の変更に関する意見が出されました。担当教員の変更については、授業内容の新鮮さを保つためにも重要であるとの指摘がなされ、具体的な交替案を挙げているグループもありました。開講時期については、幾つかの見解に分かれ、現行の時期が現実的であるという意見がある一方で、必ずしも同時期に開催する必要性はないとの意見も見られました。いずれにせよ今回の報告では、担当教員や開講時期を見直す時期にきているとの意見が多かったように思われます。

今回のワークショップに対しては、比較的多くの参加者から有意義な内容であったとの感想を得ることができました。特に、これまで保健医療総論全体を検討する機会がなかったため、多くの教員にとって担当以外の授業内容の理解を深め、全体の流れを見直す機会となったようです。

今後は、今回提言された内容を活かしていくためにも、時代の変化に対応した保健医療総論全体の柱立てや教員配置と開講時期の検討を行う具体的な取組みが必要であることを実感致しました。最後に、今回授業の報告とグループワークのリーダを引き受けて頂きました教員の方々にお礼申し上げます。

## シリーズ：大学教育のヒント 4

### 小集団による討論

F D 活動委員（一般教育科）高橋 義信

「人生で本当に大事なことは、親や教師からではなく友達から学ぶ」とか「生きるのに必要なことは教室ではなく校庭の片隅で学ぶ」と昔のえらい人が言っている。同じように教育の世界でも、「最も優れた教育法があるとすれば、それは学生が学生を教えることだ」という説がある。これは Reciprocal Peer Teaching（学生間相互教育法）のことである。今回はこの教育方法を紹介したい。

この教育方法の特徴は学生に教師と学習者の両方の役割を果たすよう求めることである。他人に何かを教えるためには、表面的な理解以上のものが必要なことは、教師なら自明のことであろう。学生に他の学生を教える役割を与えることにより、受動的な学習者という役割では得られない深い理解に学生自らの力で到達させるのである。また教える役割を果たすことで自分の理解の程度（たいてい場合は理解の不足）を容易に自己診断可能となり、また他の学生に教えた内容はより記憶に残るのである。

学生が学生に教えるという教育方法とは具体的にどのようなものであるか。

まず低レベルなものから例を示すと、「ノート検証ペア」と呼ばれるものがある。よいノートを取るということは重要な学習スキルであるが、それができない学生がかなりいることは周知の事実である。大学においてもどのようにノートを取るのかといったレベルのことを教えずにはならない困った時代になったといえるだろう。まじめに講義に出席しているにもかかわらず成績の悪い学生はノートの取り方に問題があるとまず疑うべきである（中にはテストに備えて何をすべきかわからないという学生もいるが）。そのような学生にノートの取り方を教える必要があるわけだが、教師がああすればよい、こうすればよいというだけではノートは改善しない。それに加えて学生同士でノートの取り方を教えあえばよいのである。

学生はいつものように個別にノートをとる。教師は講義の最後の10分をノートの検討の時間にする。学生は二人一組となり、お互いのノートを改

善するのである。例えば、講義の前半部分のノートを手前の学生に提示する。その学生は提示されたノートの内容の間違いを修正し、不足している内容を付け足して返却する。次に講義の後半部分についても同じことを役割を交代して行うのである。最後に二人で議論してお互いに満足するノートを完成させる。このようにすることで、ノートの取り方を相互に学習するのである。

この作業を学生に真剣に取り組ませるためには、やはり完成したノートを提出させ、評価を加えて返却するほうがよい。ペアの組み方は隣同士というのが一番簡単だが、提出されたノートの完成度が低いペアが多い場合は教師の側でペアを指定し、そのペア同士で座るよう指示したほうがよいだろう。二人で話し合うことにより、さらによいものになるとは限らないことに注意すべきである。誤りが増幅する場合もあるので教師は必ずノートの完成度を調べなくてはならない。優秀な学生はこのようなことを好まないかもしれないが、そのような学生には、教えることがもたらす学習上の利益のみならず相互に助け合うことの意義を説明すべきである。

また二人一組でノートを交換するのではなく、質問を交換するという方法もある（これはlearning cellと呼ばれることが多い）。学生は講義、あるいは読むよう割り当てられた資料や書籍の要点が答えとなる質問をいくつか個人的に作る。ペアとなった二人でその質問を交換し、相手に答えを書いてもらう。それを基に、二人は討論を行い、お互いが満足する質問 回答リストを完成させ、提出するのである。

ノートの取り方は何とかなくても、討論の仕方が分からないという学生も多い。討論の仕方を学ぶよい方法は実際に討論を体験することである。教育方法としてはFishbowl（金魚鉢、転じて八方から人目にさらされる場所・状態）と呼ばれるものがそれに当たる。

クラスの中から5人前後の学生を選び（これらの学生は、討論の模範を示す役割があるため、通常は最も優れた学生）、内側に円を描くように座ってもらう。残りの学生は真ん中の円を囲むように外側に座る。討論を行うのは内側の学生だけで外側の学生は観察者として、討論の内容と過程の

両方をノートに取ることに専念する。内側の学生による討論が終了後（討論時間は15から20分前後が望ましい）全員による討論となり、外側にいた学生も発言する機会を与えられる。ここでも発言の是非だけでなく、討論のマナーや技術といった面も扱わなくてはならない。教師は外側の学生に討論の仕方でも何を学べたかについても報告させるべきである。

Fishbowlがうまくいくためには、内側で討論する学生にあらかじめ文献講読などの課題を与え、討論内容に関して十分知識を得させる必要がある。日頃不勉強な学生も金魚鉢の金魚状態になることを知っていれば、勉強しないわけにはいかないだろう。授業の終わりに、授業で扱ったテーマについてFishbowlスタイルで討論することも可能であるが、その場合でも数分準備をする時間を与えるべきである。

Fishbowlを数回行い討論のスキルを全員がある程度獲得したなら、クラスを小集団に分けて通常の討論に移行してもよいだろうし、Fishbowlがうまく機能しているならそれを続けるのもよいだろう。

最後にJigsawと呼ばれる方法を紹介する。学生を5人前後のグループに分け、各グループにそれぞれ異なる課題を与え、その課題の「専門家」となってもらう。その後、グループは解散し、新しいグループをつくる。このグループはすべて異なる「専門家」からなるように作られ、各「専門家」は同じグループの他のメンバーに自分の専門分野の内容を教え、討論をリードするのである。

例えば、ある分野で主要な学説が5つあるとしよう。教師が順番にそれら教えていくと単調でつまらない講義になりがちである。そこで学生を5つのグループに分け、各グループに一つの学説を割り当て、その学説の専門家になるよう徹底的に集団で学習させる。各「専門家」は教えるという役割を果たすため、説明のための資料や図などを作成しなくてはならない。それらが完成した時点で、新しいグループに移行し、順番に教師役を務め、すべての学生が5つの学説について説明を受けるのである。

最後に教師の出番である。これで学習を終えてしまうと、学生は、教師は自分の役目を果たして

いない、手抜きをしていると考えがちだ。教師は模範となる自分が作成した5つの学説に関する資料を学生に配布すべきである。学生は自らのと比較し自分の理解の到達度を判断することになる。また、テストを行ってもよいだろう。テストを回収後解説すれば学生の理解はさらに深まるはずだ。

並列的な学習内容が5つ前後あるような科目では、単なる講義よりもこのような方法をとったほうが学生ははるかに深い理解を得られる。しかし、この方法は半期の間で1、2回程度に止めるべきである。それ以上行くと学生の負担が大きくなりすぎ、初めに感じた新鮮さが失われる。

Jigsawがうまくいくためには学生の十分な学習が不可欠であるが、後で同じクラスの学生に教えなくてはならないということが圧力となり、学生を勉強へと駆り立て、課題の深い理解に到達させるのである。学生は教師に無能と思われても平気だが、仲間の学生からはそのように思われたくないからである。

以上述べたようなReciprocal Peer Teachingで特に考えなくてはならないのは評価方法である。小集団で行う学習は評価が甘くなりがちで、評価方法もレポートひとつ書かせて済ませるといってお座なりなものになりがちだ。これでは集団で行う作業や討論に熱心に取り組んだ学生よりもそのようなことは何もせずレポート作成にのみ専念していた学生により点を与えることになってしまう可能性がある。集団での活動では、自分は何もせず他人に任せたり(ただ乗り効果)特定の有能な人だけに仕事を押し付ける(お人好し効果)といった好ましくない現象が生じるものである。

それらを避けるためには、レポートのような提

出物は一度ではなく数回求めるべきだし、必ず学生の集団で行う活動の参加状況を評価の対象に加えるべきである。そのため教師は学生にしてもらいたいことを文書で示したほうがよいだろう。その文書は学生との契約書となり、その契約書に書かれていること(自ら調べ、発言し、他人の話に耳を傾ける・・・)を学生が誠実に履行したかどうかを評価するのである。したがって教師は学生の行う作業や討論を注意深く観察し、問題のある学生には注意を与えたり励ましたりしなくてはならない。

しかし、すべての学生の参加状況を把握するのは困難である。それを補うのが学生の自己評価と学生間評価である。自己評価は、「私は討論に参加した」といった評価項目を5=いつもから1=まったくしないまでの5段階で評定させるものである。学生間評価とは同じグループの学生同士でお互いに評価するものである。多くの学生は他の学生を公の場で評価することを好まないの、3段階で評価させる(改善が必要、適切である、優れている)のが良い。評価項目も自己評価とは異なるものが好ましい。学生の事を一番近くで見ているのが学生であるので学生間評価は重視すべきである。

教育評価方法と達成度の関係を調べた研究をみると、教師と学生の評価を組み合わせた評価法を採用したほうが他の方法よりも高い到達度を示している。仲間の学生からも評価されることが学生のやる気を高めるからのようである。

以上のことをわかりやすくまとめると、学生は学生集団から動機付けられ、教えられるわけで、それを利用しないのは損だということです。



## シリーズ：忘れられない授業 5

### 忘れられない先生

作業療法学科 竹田里江

「忘れられない授業」というよりも、私には「忘れられない先生」があり、ここに紹介させて頂きたいと思います。

小学校5年になった初めての日はクラス替えの日でした。私には、絶対に担任になってほしくない先生があり、祈るような気持ちでその日を迎えました。その絶対に担任になってほしくない先生とは、廊下で少しでも騒ぐと鬼のような形相で怒鳴ることをはじめ、とにかく「怖い先生」と私の中に強くインプットされていた竹島先生という人でした。運命の日、私はクラス替えの表を見て、膝から崩れ落ちたのを今でも鮮明に覚えています。そして、私の横で同じように崩れ落ちている友人のMちゃん、二人の担任は竹島先生でした。絶望の中で教室に入ったあと、先生が放った一言に私たちはさらに打ちのめされました。「これから毎日体育をするから。毎日動きやすい服装できてね。きっとみんな体育好きになるから。」その日、私たちは「何が毎日体育だ、体育は週に2回と決まっているんだ、絶対に体育なんか好きになるわけがない。」と言いつつ泣きながら家に帰りました。

しかし、この竹島先生の存在、いや教育は今でも私たちの心に強いインパクトを与え続けています。

1)「毎日体育」は本当に毎日体育でした。しかし、今まで授業で経験した体育とは少し趣が違いました。最も楽しそうなのは竹島先生でした。小学生だからといって手加減することなく、ドッチボールでは一人で相手チームを全員アウトにして、満足そうな表情を浮かべていました。また、当時はやっていた「風雲たけし城」をもじって「風雲5 - 3城(5年3組)」とし、数々のアトラクションを実際につくり、生徒だけではなく先生も率先して挑戦していました。“宝物”を持ちながら平均台を超えている生徒に向かって(「ジブラルタル海峡」というアトラクション)容赦なく「大

砲発射」と言いながらバレーボールを当てていました。しかし、その先生が楽しんでいる姿は非常に印象的であり、先生の手加減ない振る舞いが、私たちを掻き立てました。次第に先生が体育と言わなくとも、私たちは毎日ウインドブレーカーを着て、吹雪でも、嵐でも普通に体育をしていました。先生と一緒に体育をすることは私たちの生活の一部になっていきました。「楽しむ」ことのできるひとは魅力的だ、人を惹きつけるんだ、そして相手の行動や心の持ち方まで変えてしまうのだと思ったのは初めての経験でした。また、私が最も恐れていた「廊下で少しでも騒ぐと鬼のような形相で怒鳴る」という場合は、教室で勉強している私たちからすると確かに廊下が騒がしい場合でした。先生は教室にいる私たちに「うるさいよね？ちょっと行って来るわ。」と言い残し、怒鳴りに行っていました。いつしか、騒いでいる生徒を怒りに行く先生の後姿はたくましく、かっこよく見えてきたものでした。

2) 絵画は野外スケッチ、理科は実験、と今の我々の言葉で言うならば「実習志向」でした。また、必ずスケッチしたものを張り出し「鑑賞会」という「フィードバック」の時間を設けていました。良い絵の例として、友人のMちゃんの絵がしばしば取り上げられました。ただ良いというのではなく、Mちゃんの絵のどの箇所がいいのか、この部分にはこういう技法を使っている、ということを中心に詳しく説明していました。小学生の私にはよくわからない所もありましたが、「なるほど」と思うことも多く、目で見てものの背景を知り、分析すること、本質を考えること、「ほほう」と納得することを経験したのはこの時が初めてだったように思います。これは研究者としての視点、ものの本質を調べて納得したい、分かると(分かった気がする)とても面白い、という思いと非常に通じるところがあると思います。また、先生は、絵をよくかけている生徒4人(先生の車

に乗れる人数)をしばしば道立近代美術館に連れて行きました。もちろんMちゃんはいつもその美術館メンバーでした。しかし、美術館で一番熱心に、生徒のことをほったらかしで絵を見ていたのは竹島先生だったと聞いています。また、「ぼくは音楽苦手だからA先生に来てもらったから。ちゃんと勉強してね。」と言い、その分野で秀でている先生をしばしば連れてきていました。小学校ではこのような「非常勤講師」はあり得ないと思うのですが、竹島先生はそれを可能としていました。このように、「小学生だからこのレベルでいい」というような発想はなく、「いいもの」「本物」「最高のレベル」を生徒にも感じさせてあげたいといった信念を持っていた先生でした。

3)理科の生物のことに關してはS君、歴史に關してはM君、家庭科の裁縫ならばYちゃんというようにその分野を得意とする生徒を「師匠」と呼び、その場面にくると必ず質問やデモンストレーションを要求し、折々に注目していました。するとその生徒は自分に質問されそうなところを予測し、予習するようになっていました。また、私立や附属中学校受験を考えている生徒には家庭学習課題や問題集を宿題として与えたり、挑戦したい問題集を持って行った場合には、それを喜んで毎日採点していました。できる生徒ややる気のある生徒には、そのレベルに合わせて際限なく課題を与え、それに対して必ず丁寧にフィードバックしていました。体育のときの豪快さとはひと味違う、一人一人に特化した丁寧な対応が印象的でした。成績というような画一的な測定基準で生徒の能力を測るのではなく、それぞれの個に、違った光るものがあり、注目して引き出す、そうすることで、ひとの次の行動は喚起され、成長していくのだなあということをも身をもって教えてもらった気がしています。この考えは私の患者さんの見方や作業療法士としての考え方にも大きく影響しています。障害や疾病だけではなく、それらを持った個々の人に注目し、光るところを見つけ、それを伸ばしていく、そうすることは、障害や疾病も含めたその人自身の心の持ち方に大きく影響を与えると感じています。ちなみに、Mちゃんはその後、美大に進み、現在は織物作家になっています。

Yちゃんは服飾系の大学に進み、大手アパレルメーカーの総合職になっています。私たちは今でも定期的に集まり、職業人、妻、母という立場を超えて、熱く語り合う大切な仲間であります。

以上のように当時、私は毎日の生活が刺激的で、夢中で過ごしていました。我クラスは、運動会、学習発表会、その他行事があれば一番になるための方法や工夫を必死で考え、それに向かって際限なく努力する集団になっていました。しかし、今、少し冷静に考えてみると、竹島先生のすごさに気づかされます。先生は当時大学卒業後4年目の26歳、今の私よりも若い年齢で校内でも最も若い先生だったと記憶しています。また、当時は画一的な教育が暗に求められていた時代だったと思います。その中で、どこからみても型破りな教育方針は、職員室で浮いていたのではないかと校長から注意を受けなかったのか？とこちらが心配してしまいます。しかし、生徒の生き生きした姿を見れば、その有効性は他の先生を納得させることができているのでしょうか？しかし、きっと、そういうことを気にする先生ではなかったのだと思います。どこまでも、自分の道を自分で追求する、自分がいいと思ったことを実践し、誰よりも楽しむ、このようなところに価値観があったのではないかと想像しています。

私自身のこのような経験から、心を動かしその後の生活の力となる教育には、以下のことが大切なのではないかと考えています。1)教員自身も自らの興味や疑問を真摯に探求し、誰よりも楽しみ、魅力的な人間であり続ける 2)学生にはそれぞれに光るものがあり、それを見つけ、磨くお手伝いをする。つまり、授業という集団としての関わりに加え、個人対個人で関わる機会や場面を充実させ、個人の質や可能性にカスタマイズした関わりを充実させていく必要があるのではないかと考えます。そうすることは、逆に集団としての力を促進するといった相互作用を生むのではないかと考えています。しかし、こうしたことを肩に力を入れなくて、自然に、自らの思いと経験に基づいて実践できる教員になれるよう、まずは自分自身を切磋琢磨していきたいと思ひます。

## シリーズ：わたしの授業紹介 4

### 授業展開に関わる工夫

F D活動委員（理学療法学科）小塚直樹

今回は私が担当している発達障害理学療法学の授業展開に関わる幾つかの工夫を紹介してみましょ。この科目は理学療法学科の3年生を対象とする講義を中心とした授業であり、前期に開講しております。手足の不自由な子どもたちに対する理学療法に関する授業で、15コマのうち5コマが概論と正常運動発達関連、5コマが脳性麻痺の理学療法関連、5コマがその他の発達障害に対する理学療法関連という構成になっています。詳細についてはシラバスをご覧くださいとよろしいかと思ひます。3年生の専門科目ですから憶えるべき専門用語も多く、理解すべき理論も多いのですが、例年、学生の意欲は比較的高いので、できるだけ一方的な教授による展開ではなく、一部に対話形式を取り入れて授業が成立するように心がけています。20数名が対象ですから、この対話、あるいは学生に対する質問は、理解深度を測る上で大切な手続きとなっています。この科目は、後期の発達障害理学療法学（演習・実習科目）の前段階に位置し、4年次臨床実習を視野に入れた場合、教科書的な内容では不十分と考え、私の臨床経験を教材として取り入れることも大切にしています。

講義の進め方としては全面的にパワーポイントを使用し、板書は学生の質問に答える時以外、行いません。学生にはあらかじめ、前期分の授業のあらすじをまとめたサブノートを教材として配布します。授業はこのサブノートに沿った形で進めていきます。このサブノートは骨組みであり、パワーポイントのプレゼンテーションにより肉付けをしていきます。その他肉付けには、教科書を2冊使用します。また運動障害の病態を理解する上で不可欠な「動き」を理解してもらうために随所でビデオ教材を使用するようにしています。我々教員がパワーポイントを使用するようになってから、いずれの授業も格段にわかりやすくなったのではないかと思ひます。それはここ数年で学会発

表の形式がスライドからパワーポイントに移行していったことを考えれば、容易に理解できます。パワーポイントの長所は、字の上手下手が関係なく、デジタルデータの貼り付けが可能で作成が容易である点でしょう。結果、最大の武器は、何といても鮮明さ、美しさ、そしてアニメーションによる効果ではないでしょうか。アニメーションを効果的に使う...ベタで専門用語が羅列されているよりも、専門用語がアニメーションにより順次登場する場合、因果関係の理解は非常に深まります。学会の特別講演などで睡魔と戦うことを強いられるお話しと、全く退屈しないお話しの違いはここにあるように思ひます。

本学でも授業にパワーポイントのプレゼンテーションを用いる教員は多いと思ひますが、実は落とし穴があります。教員は教えたような気持ちになる...学生は理解したような気持ちになるからです。

多くの場合、学生はパワーポイントの印刷資料を要求しますが、私は配布しません。以前パワーポイントのプレゼンテーションをそのままハードコピーして学生に配布したことがありましたが、これは要注意です。後日その資料に目を通した時、理解困難な箇所が結構ある。たまたま欠席して、その資料だけ受け取った場合、全く意味不明となってしまいます。そのような学生は決まって配付資料を片手に質問に来ます。そんな時、「ちゃんと授業で説明したよ...」、「授業に出ていれば理解できるよ...」と、決まった回答しか与えられません。パワーポイントのプレゼンテーションはリアルタイムでこそ有効なのだと思います。

基本的なことですが、私の授業は積極的に参加していなければわからないのです。授業に参加している学生に対する配慮を多く取り入れることによって、結果的に不参加に傾く学生を抑止することは可能だと思ひます。

このために私は学生に対して、大切な部分は必

ず自ら書くことを習慣づけるようにしています。憶えるべき専門用語は、キーワード的に使用し、理解すべき理論は因果関係の理解を大切にするように指導します。このような学生に対する揺さぶりを強調していくことにより、講義の回数を重ね

る毎に、学生が阿吽の呼吸のように大切な部分を理解してくれるようになります。

工夫といいましても基本的なことを忠実にやる王道ではないか...と考えております。



F D 通信へのご感想、ご意見をお待ちしています。

E-mail : fdhs@sapmed.ac.jp

発行日：平成18年2月1日

編集・発行：札幌医科大学保健医療学部 F D 活動委員会

委員長：稲葉佳江

委員：吉尾雅春、坪田貞子、小塚直樹、高橋義信、大日向輝美、坂上真理